

《研究ノート》

# 特別支援学校における教育実習生への実習指導の 在り方について

——実習振り返りシートの分析を通して——

工藤 洸一 邦 島田 博 祐

## ■ 要旨

本研究では、特別支援学校で教育実習を行う実習生が児童生徒との関わりを授業づくりに生かすための実習指導の在り方を検討することを目的とした。そのために、特別支援学校で教育実習を行った実習生に、実習振り返りシートを用いた実習指導を行い、実習生と指導教員に対して実習振り返りシートに関するアンケート調査を行った。その結果、アンケートでは実習振り返りシートが実習生にとって生徒との関わりを振り返るためのツールとなり、それを用いた実習指導を受けることで、実習生がPDCAサイクルを体験しながら生徒指導や授業づくりの改善に一定の効果を示したと結論付けることができたものの、実習振り返りシートによる自己評価の結果からは、実習生が授業で個に応じた指導に難しさを感じ、日常生活場面と授業での生徒との関わり方の違いに気づくことが示唆された。

そのために教育実習を通じて、実習生に一齐指導の中で個に応じた指導を行うティームティーチング(T・T)に関する実習指導を行い、授業でティームティーチングの効果的運用につながる教員間の連携を実習生が学修することを今後の課題としてあげた。

## ■ キーワード

教育実習・自己評価・授業づくり・特別支援学校

## ■ Key Word

Teaching Practice・Self-Evaluation・Class Planning・Special Needs Schools

## I. はじめに

教育実習は教育に必要な専門的知識や技能、教師としての役割、問題意識等について、学校教育現場での体験を通して学ぶ重要な機会であり、教員養成において教育実習のもつ意味は大きい(渡邊ら、2008)。加えて、特別支援学校での教育実習には教育実習生(以下、実習生)が障害のある幼児児童生徒の支援や指導方法を学ぶことで、インクルーシブ教育システム構築に関わる人材を育成する使命がある。また、特別支援教育に携わる教員の専門性の向上といった最近の特別支援教育

の動向も踏まえれば、改めて特別支援学校での教育実習の在り方を再考する必要がある。

特別支援学校での教育実習の在り方に関する先行研究としては、特別支援教育教員養成課程を設置している大学と附属特別支援学校が連携して行ったものがあり、それらの研究では、主に実習校での指導面での課題や評価の在り方について検討を行っている（渡邊ら、2008；坂本ら、2009；渡邊ら、2019）。また、特別支援教育教員養成課程を設置している大学が、実習生の受け入れを依頼している公立の特別支援学校を対象にアンケート調査を行っている研究も数多くあり、例えば今野ら（2018）は、2011年から2017年までの7年間にわたって特別支援学校の実習指導担当教員（以下、指導教員）を対象に教育実習に関するアンケート調査を行っている。この調査で実習生への指導内容のうち「子どもの関わり方」、「子ども理解の方法」が減少傾向にある一方、「障害の基本的な特性」、「教材教具の作成」、「教師の心得」が増加傾向にあると指摘している。この結果から「子どもの関わり方」、「子ども理解の方法」が減少している理由として、実習生の児童生徒に対する基礎的な観察力、理解力、対応力の向上をあげており、また、「障害の基本的な特性」、「教材教具の作成」の増加については、児童生徒の障害の重度・重複・多様化と、これに対応した研究授業の準備の過程として指導内容・方法が増えたからだと結論付けている。しかしながら、この調査結果には指導教員の専門性の向上が影響している可能性も考えられる。その理由として、文部科学省（2021）は、平成18年度は6割程度だった特別支援学校の教諭免許状の所持率が、令和2年度時点では8割にまで達していると報告を行っているからである。実際に、免許状所持率の向上のために、特別支援学校教員免許状を所持していない現職の教員に対しても、免許法認定講習等を通じて免許状取得促進の取り組みが行われていた。結果、指導教員の特別支援教育に関する専門性も向上し、実習指導では、児童生徒理解を促すための関わりを重視した指導から、児童生徒との関わりから障害特性を把握し、児童生徒の実態に応じた授業づくりに重きを置く指導を行うようになってきたことで、特別支援学校での教育実習の在り方が変化しているといえる。さらに渡邊ら（2019）は、教育実習では実地授業までにより児童生徒と関わり、実態を把握し、実地授業に向けた準備と授業づくりを通してPDCAサイクルを体験できるような実習プログラムの工夫が必要であると指摘しているが、特別支援学校の教育実習でPDCAサイクルを体験できる実習プログラムに関して検討している研究は見当たらない。

本研究は、特別支援学校で教育実習を行う実習生が児童生徒との関わりを授業づくりに生かすための実習指導の在り方を検討することを目的とした。そのために、中学部で教育実習を行う実習生が実習振り返りシートで生徒との関わり方を自己評価し、指導教員が自己評価に基づいて生徒との関わり方を改善し、授業づくりに生かせるような実習指導を行った。また、実習生と指導教員に対して実習振り返りシートに関するアンケート調査を実施することで実習指導の効果を分析した。なお、指導教員は実習指導の経験が少ない教師を対象とした。その理由として、今野ら（2018）によれば、特別支援学校の教師は心身の不調を訴えるケースも多く、それにより教育実習を担える人材が相対的に少なくなっており、若手が不安を抱えながら実習業務を担わざるを得ないのが現状であるという。また、中村ら（2018）は実習生の実習報告書の分析から他学部比べて中学部での授業に難しさを感じている学生が多いことを指摘している。したがって、本研究では今日の教育現場が抱える課題を考慮して対象者を設定した。

## II. 方法

### 1. 対象者

2021年に筆者が勤務する特別支援学校にて2週間の教育実習を行った大学4年生1名及び実習生の指導教員1名を対象とした。実習生が配属されたのは知的障害教育部門中学部2年生であった。当時、実習生は特別支援学校教諭1種免許状の他に幼稚園教諭1種免許状及び保育士資格を取得する見込みであった。指導教員は教員経験年数が5年で、教育実習の指導教員として実習生を指導するのは今回が初めてであった。

### 2. 手続き

本研究で用いた実習振り返りシートは、明星大学で実施していた対人的コミュニケーション支援を中心とした小集団 SST プログラム「MSP(明星サポートプログラム)」(島田・榎本、2011)で、学生補助トレーナー指導用の振り返りシートを参考に、特別支援学校での教育実習生指導用に作成したものである。

実習初日、対象となる実習生には2週間分の実習振り返りシートをまとめて配付した。その後、図1に示すように、実習生は実習を行い、生徒下校後に実習振り返りシートでの自己評価及び実習日誌の作成を行った。また、毎日放課後に指導教員は実習振り返りシートを受け取った後、実習生との反省会及び研究授業に向けた打ち合わせを行った。実習生は、実習6日と7日目に研究授業に向けたプレ授業を行い、研究授業及び研究協議は実習9日目に実施した。なお、実習8日目には他学部での研修があり、当該学部の児童生徒との関わりがほとんどなかったため「振り返りシート」での自己評価は実施しなかった。

実施実習最終日には、実習生と指導教員にアンケート調査を実施した。

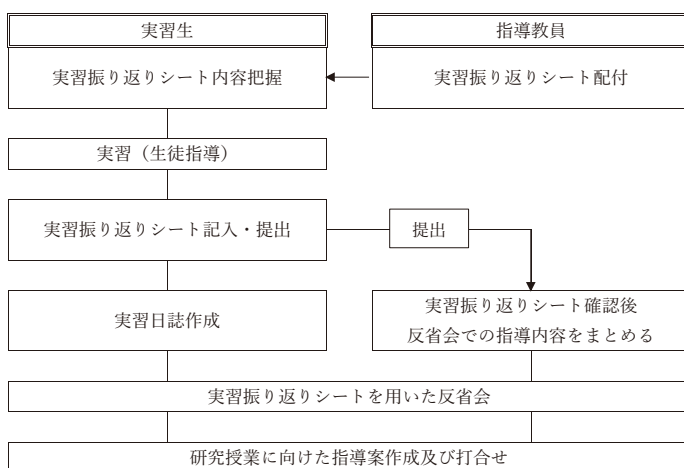


図1 実習振り返りシートへの記入および振り返りまでの手順

実習振り返りシートは、授業の際に授業者が意識すべき「指示・教示の設定」、「授業（課題）中の配慮・工夫」、「行動問題への対応」といった3つの大項目から構成されている。さらに「指示・教示の設定」には5つの小項目、「授業（課題）中の配慮・工夫」と「行動問題への対応」には2つの小項目、計9つの小項目から成り立っている（表1参照）。また、3つの大項目には、それぞれ「次につなげるための反省・改善案等」として自由記述欄を設けた。

表1 実習振り返りシートの項目内容

大項目	小項目	
指示・教示の設定	1-1	子どもの注意を引くこと（モデルを見せる・教材を使う等）ができる。
	1-2	子どもの実態に合わせた内容や方法で指示を出すことができる。
	1-3	子どもの注意を持続させるために、指示や説明の長さを適切な量にすることができる。
	1-4	子どもの注意を引くために、子どもの興味関心を利用することができる。
	1-5	子どもにとってわかりやすい声の速さやトーンに調整することができる。
授業（課題）中の配慮・工夫	2-1	ヒントや手助けの度合いを難易度に応じて変更することができる。
	2-2	「選択する」等の子どもの決定に関与できる機会が設定できる。
行動問題への対応	3-1	子どもの参加・反応を最大限増やすための関わりが考えられる。
	3-1	子どもが活動や課題を拒否した場合の対応を考えられる。

自己評価は9つの小項目を「できた」を2点、「要改善」を1点として記入し、それらを合計したものである。なお、実習生がそのねらいをもって生徒と関わる場面がなかったと判断した場合は「該当せず」に記入し、それは0点とした。

実習生を対象としたアンケートでは、実習における実習振り返りシートの効果に関する内容10項目に対して「とてもそう思う」、「わりとそう思う」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の4段階での回答を求めた（表3参照）。なお、「実習振り返りシートの内容は、実習に役立ちましたか」という項目に、実習生が「とてもそう思う」、「わりとそう思う」と回答した場合のみ「指導案作成」、「研究授業」、「障害特性の理解」、「生徒とのコミュニケーション」、「教材づくり」、「その他（自由記述）」のうち役立ったと感じたものを回答（複数回答可とした）するように求めた。

指導教員を対象としたアンケートでは、「振り返りシート」が指導内容として妥当であったか、そして指導を行う際に効果的な方法であったかに関する内容10項目に対して、実習生と同様に4段階での回答を求めた（表4参照）。

表2 実習生を対象としたアンケート調査の質問項目と回答結果

質問項目	回答結果
1 実習振り返りシートの内容は、実習に役立ちましたか。	とてもそう思う
2 実習振り返りシートの内容を意識して、生徒と関わる事ができたと思いますか。	わりとそう思う
3 実習振り返りシートの内容を意識して、研究授業を行う事ができたと思いますか。	とてもそう思う
4 実習振り返りシートの内容を意識して、授業を観察する事ができたと思いますか。	わりとそう思う
5 実習振り返りシートに記入した反省を生かして改善する事ができたと思いますか。	とてもそう思う
6 実習期間中に生徒との関わりを増やす事ができたと思いますか。	とてもそう思う
7 あなたは授業で、生徒にとってわかりやすい指示を出せると思いますか。	わりとそう思う
8 あなたが授業を行った際、生徒の注意を自分に向けられると思いますか。	わりとそう思う
9 実習振り返りシートの内容は、わかりやすかったですか。	とてもそう思う
10 実習振り返りシートは、教育実習で有効な指導方法だと思いますか。	わりとそう思う

表3 指導教員を対象としたアンケート調査の質問項目と回答結果

質問項目	回答結果
1 実習振り返りシートは、実習生への指導を行う際に役立ちましたか。	とてもそう思う
2 実習振り返りシートの内容は、実習生が生徒と適切に関わるために役立ちましたか。	とてもそう思う
3 実習振り返りシートは、実習生が生徒を理解するために役立ちましたか。	わりとそう思う
4 実習振り返りシートの内容は、実習生が授業を観察する際に役立ったと思いますか。	とてもそう思う
5 実習振り返りシートを使用することで、実習生への指導時間は短縮されましたか。	とてもそう思う
6 実習振り返りシートを使用することで、実習業務の負担は増えたと思いますか。	あまりそう思わない
7 実習生は実習振り返りシートの内容を意識して、生徒と関わったと思いますか。	とてもそう思う
8 実習生は指導案を作成する際、実習振り返りシートの内容を参考にしたと思いますか。	わりとそう思う
9 実習生は実習振り返りシートの内容を、研究授業に生かしていましたか。	とてもそう思う
10 実習生は実習振り返りシートを用いた実習指導を生かして、実習に取り組めたと思いますか。	わりとそう思う

### Ⅲ. 結果

#### 1. 実習振り返りシートの分析

実習振り返りシートにおける実習生の自己評価得点を図2に示す。また、実習振り返りシートの各項目別の得点を表4に示す。

図2のとおり、実習生の自己評価得点は、実習を重ねるにつれて上がっており、実習初日の自己評価得点は6点であったが、実習最終日である10日目には14点と2倍以上に上がっている。しかしながら、実習6日目の自己評価得点が13点だったのに対して、実習7日目のみが11点に下がっている。さらに、表4のように実習初日から4日目までは、実習生が「できた」と自己評価した平均項目数は1項目であったのに対して、実習5日目と6日目では4.5項目になり、5日目以降では実習生が「できた」と自己評価した項目が増えている。しかしながら7日目のみ、実習生が「できた」と自己評価した項目は2項目にとどまり、9日目以降に再び「できた」と自己評価した項目数が増えている。

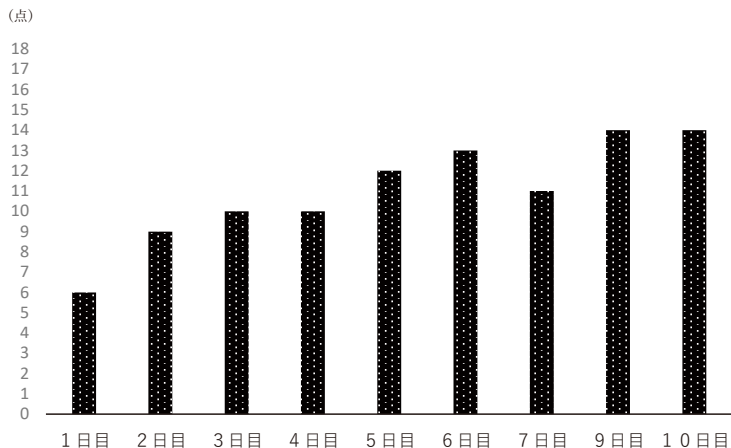


図2 実習生の自己評価得点

表4 実習振り返りシートの各項目別の自己評価得点

大項目	小項目	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	9日目	10日目
指示・教示の設定	1-1	0点	1点	2点	1点	2点	2点	1点	1点	1点
	1-2	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点	2点	2点
	1-3	0点	1点	1点	1点	1点	2点	1点	1点	1点
	1-4	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点	1点
	1-5	2点	2点	1点	1点	2点	2点	2点	2点	1点
授業（課題）中の配慮・工夫	2-1	1点	1点	1点	2点	0点	1点	1点	2点	2点
	2-2	1点	0点	1点	1点	0点	2点	2点	2点	2点
行動問題への対応	3-1	0点	1点	1点	1点	2点	2点	1点	1点	2点
	3-1	0点	1点	1点	1点	2点	1点	1点	2点	2点

## 2. 実習における「振り返りシート」の効果に関するアンケート調査の分析

### (1) 実習生を対象としたアンケート調査の結果

実習生が「とてもそう思う」と回答した項目は、10項目のうち①「実習振り返りシートの内容は、実習に役立ちましたか」、②「実習振り返りシートの内容を意識して、研究授業を行うことができましたか」、③「実習振り返りシートに記入した反省を生かして改善することができたか」、④「実習期間中に生徒との関わりを増やすことができたか」、⑤「実習振り返りシートの内容は、わかりやすかったですか」の5項目であった。また、実習振り返りシートの内容は、指導案作成、研究授業、障害特性の理解、その他（実習日誌記入）に役立ったと回答した。

### (2) 指導教員を対象としたアンケート調査の結果

指導教員が「とてもそう思う」と回答した項目は、10項目のうち①「実習振り返りシートは、実習生への指導を行う際に役立ちましたか」、②「実習振り返りシートの内容は、実習生が生徒と適切に関わるために役立ちましたか」、③「実習振り返りシートの内容は、実習生が授業を観察する際に役立ったか」、④「実習振り返りシートを使用することで、実習生への指導時間は短縮されましたか」、⑤「実習生は「実習振り返りシートの内容を意識して、生徒と関わったか」、⑥「実習生は「実習振り返りシートの内容を、研究授業に生かしてましたか」の6項目であった。

## IV. 考察

### 1. 実習振り返りシートについて

実習初日及び2日目は、実習生が教員の指導や授業を観察する場面が多かったこともあり、生徒と関わる機会が少なく、生徒との関わり方を観察から学んでいたため、「該当せず」への記入が多いことが自己評価得点に影響したと考えられる。よって3日目以降、実習生が生徒との直接的な関わりを経験する機会が増えたことで、自己評価得点が上がったのではないかと考える。その証拠に、実習初日と2日目の自由記述欄には「子どもがもし、活動などを拒否した場合、今の自分だったら、



戸惑って何もできなくなってしまうと思うので、先生方に聞いたり、その時の対応をこれから見たりして学んでいきたいです」や「今日の課題の時間に拒否をしている様子の生徒さんがいましたが、先生が対応されていたようには、まだできないと思うので、色々な先生方の対応方法を見て、色々な対応方法を学びたいと思います」といった教師と生徒の関わり方から実習生が感じた指導の難しさについての記述が目立つ。しかしながら、3日目以降は、例えば「今日、帰りの会を担当させていただいたので、その時に子どもの注意を引くように意識できたかなとは思いますが、緊張して少し早口で進めてしまったかなと感じました。落ち着いてできるようにしたいです。」のように実習生が自分の行動を振り返って、生徒との関わり方についての改善点を記述している。

実習7日目の自己評価得点が下がった理由として、プレ授業での実習生の指導に対する生徒の反応があげられる。日常生活場面（以下、生活場面）で生徒と関わる際には、マンツーマン対応が基本となるため、生徒とのコミュニケーションは特定の生徒の実態に合わせることができる。また、生活場面での生徒との関わりを、実習生は教員の行動観察を通して学習することが可能である。一方、授業では実態の異なる生徒全員が授業内容を理解できるように、実習生はどの生徒にも伝わりやすい教示を考えなければならない。さらに、授業者として実習生は、生徒の反応に対して臨機応変に指導をしなければならない。したがって、実習生が生活場面で生徒と関わった経験の結果が、実習初日から6日までの自己評価得点であり、7日目のプレ授業をきっかけに、授業での生徒への指導や関わり方に難しさを感じた結果として実習生の「できた」という自己評価項目が減り、自己評価得点が下がったのではないかと推察できる。実際に実習振り返りシートの自由記述欄には、「あまり個々に対する言葉かけができず、実態を考えた関わりができなかった」、「子どもたちに対して発問を投げかけるときに、反応が返ってこない子どもが多くいたが、その子どもたちへの関わりを考えられなかった」といった授業での個々の生徒への対応に関する反省の記述が見られる。

したがって、実習生が実習振り返りシートで生徒との関わり方を自己評価した結果、生活場面での生徒との関わりを授業での指導に結び付けることに難しさを感じ、結果として実習生が生活場面と授業者として指導する場面での生徒との関わり方の違いに気づく可能性が示唆された。この実習生が授業での指導の難しさを実感した理由として、一斉指導の中でも個に応じた指導を行うティーム・ティーチング（以下、T・T）の機能を理解するまでには至らずに授業を行ったことが考えられる。そのため、実習生は特別支援学校での教育の特色でもあるT・Tについて学修する必要があるのではないだろうか。

特別支援学校では、通常、T・Tの指導形態で一斉指導による授業が行われている。このT・Tは、複数の教師が役割分担をして同一の児童生徒を対象に協力しながら教育計画を立て実践指導する方式をいう（渡邉ら、2008）。そのため、T・Tでは主担当（以下、MT）が中心となって授業をすすめ、副担当（以下、ST）が児童生徒に対して個別の指導を行っていく。その際、T・Tを効果的に運用し、授業をすすめていくためには、MTは「あいさつ、指示、示範、合図、進行」、STは「学習援助、示範援助、注意喚起、教材・教具の準備、視聴覚教材の操作、雰囲気盛り上げ」といったそれぞれの役割を明確にさせ、その役割をきちんと果たしていけるようにしていかななければならない（渡邉ら、2008）。よってT・Tの効果的な運用は、前述した実習生の授業に関する反省を解決するための方法の一つとして考えることができ、今後の課題として実習生がT・Tのような指導形態での授業、そしてその指導形態を効果的に機能させるための教員同士の連携について学修するこ

とができる実習指導を検討していく必要があると考える。

## 2. 実習における「振り返りシート」の効果に関するアンケート調査について

アンケート調査の結果から、実習生と指導教員の両者とも実習振り返りシートの内容が研究授業で生かされたという回答で共通している。よって実習生が研究授業の授業づくりに実習振り返りシートを生かすことができ、本研究では実習振り返りシートが実習生の実習指導にある一定の効果を示したと結論付けることができるであろう。

特別支援学校の教員は、生徒との関わりを通じて生徒一人ひとりの実態を把握し、その情報を基に生徒の能力や適性の多様さに応じて授業を行っている。このプロセスには、特別支援学校の教員経験に裏付けられた知識や指導技術が必要になると考える。そのため、実習振り返りシートが生徒理解や指導スキルといった授業づくりに必要な情報を可視化することによって、実習生は限られた実習期間の中でも、授業づくりを意識しながら生徒と関わる経験を積めたことが、アンケート調査の結果に反映されたのではないかと考える。

また、実習生は実習振り返りシートに記入した反省を生かして改善することができたと回答していることから、図1にも示したように、実習初日の実習振り返りシートの提示によって、実習生が生徒との関わりから学ぶべき内容を把握(Plan)し、実習に臨む(Do)ことができたと考える。さらに実習振り返りシートは、実習生が生徒との関わり方等を振り返る(Check)ためのツールとなり、指導教員からの指導を受けることによって、その指導内容を翌日の生徒との関わりに生かす(Action)ことができ、結果として実習生はPDCAサイクルを通じて生徒への指導や授業を改善する経験を積めたといえる。

## V. おわりに

本研究では、教育実習生受け入れ校の立場から、実習生が経験した生徒との関わりを授業づくりに生かせるように、実習振り返りシートを用いた実習指導を行い、その効果から実習指導の在り方を検討した。その結果、実習振り返りシートのような授業づくりに必要な情報を可視化するツールが、PDCAサイクルを生み出し、それを用いた実習指導が生徒との関わりや授業づくりの改善につながる可能性を示したといえる。一方で、特別支援学校での教育実習における実習生への指導内容は、指導教員に委ねられている場合が多く、その結果として指導教員の教員経験の年数や指導経験の有無で、実習指導の質が異なってくる可能性がある。本研究では、実習生への指導が未経験の教師を対象としたため、指導教員としての経験年数によっては異なった結果が得られた可能性も否定できない。したがって、本研究から得られた知見は、筆者が勤務する特別支援学校で教育実習を行った実習生と指導教員各々事例からの分析結果であることから、直ちに一般化はできない。そのため、事例数を積み重ねる中で検討を行っていくことが今後の課題として考えられる。

なお、本研究の実施にあたり、調査にご協力いただいた教育実習生及び実習指導担当教員に対して深く感謝申し上げます。



## 文献

- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課「令和2年度特別支援学校教員の特別支援学校教諭等免許状保有状況等調査結果の概要」[https://www.mext.go.jp/content/20210308-mxt\\_tokubetu01-000013247.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210308-mxt_tokubetu01-000013247.pdf)  
(閲覧日:2021年11月5日)
- 今野邦彦・池田浩明・小川透「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(4)」『藤女子大学人間生活学部紀要』55,2018,pp.95-100.
- 中村明美・高井弘弥・橋詰和也・宇野里砂「特別支援学校教育実習指導の提言と展望」『学校教育センター年報』3,2018, pp.23-32.
- 坂本学・丹羽克文・下地栄律子・斎藤志保子・河辺正明・山田賢治・山本敬子「特別支援学校小学部での教育実習における教育実習生に対する指導内容-指導案指導と授業反省を通じて-」『三重大学教育学部付属教育実践総合センター紀要』29,2009, pp.47-53.
- 島田博祐・榎本拓哉「発達障害児のための明星大学サポートプログラム(MSP)に関する実践報告」『教育学部研究紀要』1,2011, pp.195-205.
- 渡邊貴裕・橋本創一・井上剛・菅野敦・大伴潔・林安紀子・小林巖・尾高邦生・杉岡千宏・霜田浩信・山口遼・李受眞・廣野政人・熊谷亮「教育実習の指導・評価点に関する実態把握(1):国立大学附属特別支援学校を対象とした検討」『東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要』15,2019,pp.49-56.
- 渡邊貴裕・橋本創一・菅野敦・中村勝二「特別支援学校における効果的な教育実習の実践」『発達障害支援システム学研究』7(1), 2008,pp.19-29.